

前号を読んで

大学におけるセンターの役割と課題

薬袋秀樹

図書館情報学系教授

前号の特集「センターにおける教育・研究」には17の様々なセンターの報告が掲載され、興味深い内容でした。本学には30近いセンターがあり、研究を行うセンター、教育を行うセンター、教育研究の両方を行うセンター、教育研究基盤を提供する支援センターの4種類に分類できると言われています。

17のセンターのうち、研究や支援を行うセンターでは様々な領域に関するレベルの高い研究や支援が行われていることが報告され、本学の研究領域の広さとレベルの高さを知ることができました。教育を行うセンターには日頃お世話になるものが多く、地道な活動によって重要な役割を果たしていることが理解できました。多くのセンターは研究・教育・支援の役割を兼ねているようです。

報告を読んで、センターには次の三つの課題があると感じました。

センターと学群・学類・研究科の間の意思疎通や連携協力が十分でない場合があります。意思疎通のための努力や連携協力のための組織運営の工夫が必要だと思います。

支援センターのサービス業務は主に技術職員の方々が担当されています。池田先生は支援センターについて「研究者が研究に専念できる体制作りが、わが国の研究レベルを上げる最も効果的な処方箋である」という指摘を紹介し、技術職員の重要性を指摘されていますが、まったく同感です。他のセンターについても同様だと思います。日本の大学はこの点をもっと社会に訴える必要があると思います。

センターの教員は、センター固有の業務を負担しているのに、一般の教員と同様に研究業績でしか評価されない傾向があることが指摘されています。筆者は、図書館情報大学で生涯学習教育研究センター長とその前身の生涯学習推進室長を5年間併任し、4センターからなるセンター会に属していました。そのとき、この点を痛感しました。この点は以前に比べれば改善されているようですが、根本的な改善が望まれます。

独立行政法人では、その自律性を活かし、センターの教員が働きやすく、センターの資源が十分活用される体制が作られることを期待したいと思います。

(みない ひでき/公共図書館論)